



こんな時
こんな本

何もかも脱ぎ捨てたいほど暑かった夏がようやく去って、おしゃれの秋がやってきます。現代は「人は見た目」の時代とか。ファッションを考えるための本を集めました。
(中島耕太郎)

リプロ池袋本店
矢部潤子さんに聞く

おしゃれを磨く

「得できた」という。

その人の色のタイプを「春夏秋冬」の四つに分ける『働く女性のための色とスタイル教室』(七江亜紀著)も薦められた。記者が試したところ、明るく春めいた色の服を選ぶべきだそう。落ち着いた色が好みだったので、妻から「やっぱりわかっていなかった」

確かに身に着ける物は内面に作用する。おしゃれを通してライフスタイルまで語るのが、美容ジャーナリストによるエッセー③『されど、服で人生は変わる』。「じっくり読ませるファッション哲学。内側から元氣が出るサプリメントのようだ」と矢部さん。

失戀したら、それまでの自分を超越するためにより上等な靴を2足買え。雨の日こそ目いっぱいのおしゃれをしろ。こんな具体的な行動を指南する。「きちんと」ほど人をキレイに見せるものはない」「頭の良さ」と「洗練」はどうしたって切り離すことができない」といった心構えは男性にも参考になるだろう。記者からは男性向けに、服飾史家による④『ダンディズムの系譜 男が憧れた男たち』を。19世紀初頭に現代紳士服の基礎を作ったポー・ブランドメルから、ジェームズ・ボンド、米国のオバマ大統領まで、ダンディーな16人の服と生きざまを活写する。歴史読み物として面白いうえ、「男は中身」と考えてきた人には、身だしなみを考える契機になるかもしれない。

◆紹介した本を各1冊、計4人に差し上げます。住所・氏名・年齢と書名を明記し、はがきで〒104・8011朝日新聞be「再読」係へ。23日の消印まで有効です。また、アサヒ・コム(<http://book.asahi.com/saidoku/>)から購入できます。



まず、自分に何が合うのかを知らないことには、おしゃれは始まらない。身長や体形は客観的なデータで把握できても、よくわからないのが色だ。そこで、色の専門家が書いた①『色でキレイを手に入れる!』。肌や髪など、その人の持つ色みと、服の色との組み合わせが重要という。自己診断の項もあり、自分の肌が黄色っぽいのか、青みがかったているかが判別できる。

たかが服、されど服



①今井志保子著、2003年(日本実業出版社、1575円)



②押田比呂美著、07年(KKベストセラーズ、1523円)



③齋藤薫著、09年(講談社、1575円)

— 記者のお薦め —



④中野香織著、09年(新潮選書、1260円)